昭和50年10月27日第3種郵便物認可
平成26年8月1日発行／毎月1回1日発行
ISSN 0389-0856

月刊建築仕上技術

CONSTRUCTION FINISHING TECHNIQUES

8
AUG.2014
VOL.40 NO.469

特集 技能者・技術者不足にどう対応するか

第1部 専門工事業から見た技能者・技術者不足への対応策
第2部 工事の省略化を実現する材料・工法

●寄稿●バウハウス（ヴァイマール時代）●隔月連載●これからの建築仕上げ材

■寄　稿■

バウハウス(ヴァイマール時代)

お茶の水女子大学名誉教授　　田中　辰明

はじめに

本誌2014年２月号(Vol.39No.463)に「世界文化遺産アルフェルトのファーグス工場」という題でヴァルター・グロピウスが設計した木製靴型製造工場を紹介した。この業績によりグロピウスがバウハウスの初代校長になったことを解説した。

１．バウハウス以前のドイツ近代建築

バウハウス以前のドイツ近代建築として、グロピウスが1911年に設計したアルフェルトのファーグス工場(**写真１**)とペーターベーレンスが設計し1911～1912年に建設されたベルリンのAEGタービン工場(**写真２**)がある。両方の工場とも現在立派に稼働している。これらは「近代建築の曙」と呼ばれている。従来のドイツ建築は窓が少なく室内が暗いものが多かったが両方の建築ともガラスを多用している所に特徴がある。

２．バウハウス

バウハウス(Bauhaus)は、1919年、ドイツのヴァイマール(Weimar)に設立された、工芸・写真・デザインなどを含む美術と建築に関する総合的な教育を行った学校である。合理主義的・機能主義的な芸術を目指した事から、この流れをくむ芸術をバウハウスと呼ぶこともある。学校として存在し得たのは、ナチスにより弾圧を受け1933年に閉校されるまでのわずか14年間である。しかし、ヴァルター・グロピウス(Walter Adolph Georg

写真２　ペーターベーレンスが設計し 1911 ～ 1912 年に建設されたベルリンの AEG タービン工場

写真１　グロピウスが 1911 年に設計したアルフェルトのファーグス工場

写真３　ヴァイマールに建つゲーテ・シラー像

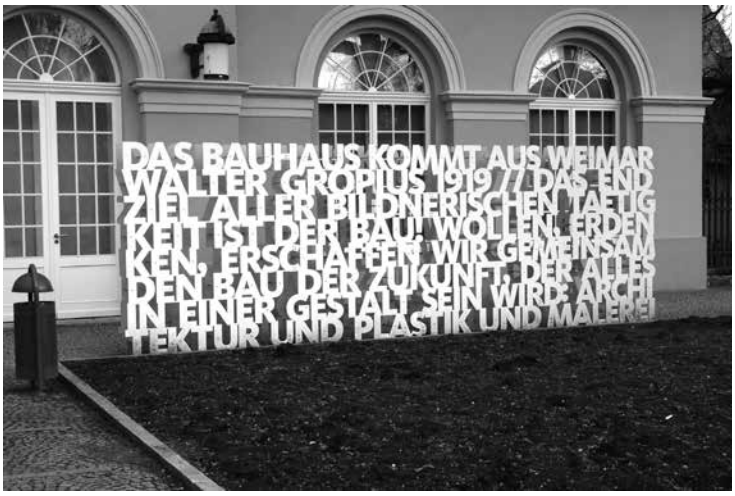

写真４　現在ヴァイマールにあるバウハウス記念館

Gropius,1883～1969）を初めそこで講義をした教師による表現主義傾向はモダニズム建築の発展、近代芸術、芸術教育に大きな影響を与えた。ナチスによる弾圧を受けたグロピウスは1934年に一旦英国に亡命し、1937年には米国のハーバード大学に招かれペイ・フリップ・ジョンソンらを育てた。最後の校長であったミース・ファン・デル・ローエ（Ludwig Mies van der Rohe、1886～1969）は米国のシカゴへ亡命し、そこでガラスの超高層建築を次々に建設し、現代建築のリーダーとなった。バウハウスはドイツ語で「建築の家」を意味し、中世の建築職人組合であるバウヒュッテ（Bauhütte,建築の小屋）という語が語源である。これをグロピウスが現代風の表現にしたものである。バウヒュッテでは教授を棟梁（Meister、マイスター）学生を職人（Gesell、ゲゼル）、もしくは徒弟（Lehrling、レールリング）とギルドがあった時代の呼び方で呼んでいた。この伝統はバウハウスでも引き継がれ、同様の呼び方が行われた。

バウハウスの設立について説明すると、ヴァイマール大公によりベルギーの建築家ヴァン・デ・ヴェルデが招かれ、1902年にヴェルデ私設の「工芸ゼミナール」が設立された。1908年「大公立美術工芸学校」に発展。ヴァン・デ・ヴェルデはドイツヴェルクブンド[註1)]展でヘルマン・ムテジウス[註2)]と衝突し、1915年にドイツを去らざるを得なくなった。そのため、後継を建築家ヴァルター・グロピウスに託した。

1918年にドイツ帝国が崩壊して大公の統治が終わり、ヴァイマール共和国が成立した。ヴァイマール共和国と言っても首都がヴァイマールにあったのではなく、首都はベルリンであった。当時の憲法の草案がヴァイマールで作成されたことからヴァイマール共和国と呼ばれている。ヴァイマールはゲーテ、シラー（**写真３**）が活躍した極めて文化的な町で、かつヴァイマール憲法は民主的な理想的な憲法と言われ、現在のドイツ憲法もこの流れをくんでいる。グロピウスはバウハウス発足に当たり学生は男性100名、女性50名の規模でスタートしようと考えていた。しかし男性と女性の応募者は数が同じであったと言う。男女同権を唱えるヴァイマール憲法の手前、多数の女性を受け入れる事となった。女性の多くは織物や絨毯の制作、工芸品製作に従事した。そして女性に社会進出を促す事となった。

しかしヴァイマール共和国時代の憲法は理想的であっても、政治は不安定で、政権が良く交替し、ついには1933年にヒットラーが率いるナチス党が政権を掌握するという破綻への道を歩んでしまう。1919年、工芸学校と美術学校が合併して「国立バウハウス・ヴァイマール」が設立された。**写真４**はヴァイマールにあるバウハウスの記念館であり、現在は当時の作本を公開する展示館となっている。建物の前のドイツ語のオブジェはグロピウスの目指したバウハウスの教育目標の要約を表示している。「バウハウスはヴァイマールから始まった。ヴァルター・グロピウスが1919年に創設した。全ての造型美術の従事者が最終的に目指すところは建築である。我々は力を合わせて将来の建築に夢を持ち、思考し、そして創造しよう。建築家、彫刻家、そして画家は皆で造形技術に向かわなければならない。」初代校長にグロピウスが就任し、当時は1911年にヴァン・デ・ヴェルデ設計で建てられた旧

工芸学校の建物が校舎として使用された。同年にバウハウス創立宣言が出された(宣言の表紙はライオネル・ファイニンガーの「社会主義の大聖堂」が使用された)。芸術と技術の統合した最終の姿が建築であるとするグロピウスの思想に従い、入学当初の6ケ月間は造型基礎教育として予科過程と呼ばれる実習が課せられた。この予科教育は非常に特徴のあるもので、ヨハネス・イッテンが担当した。以降徐々に台頭を始めていたナチスにバウハウスの自由主義、社会主義、ついには共産主義者がバウハウスの中にいるとして弾圧を受けるようになる。そして設立されたヴァイマールを離れ、デッサオ、さらにベルリンへと北上するように所在地を移動している。その間の校長は次のように変化した。

・1919～1925国立バウハウス・ヴァイマール
　校長：ヴァルター・グロピウス
・1925～1928市立バウハウス・デッサウ
　校長：ヴァルター・グロピウス
・1928～1930市立バウハウス・デッサウ
　校長：ハンネス・マイヤー
・1930～1932市立バウハウス・デッサウ
　校長：ミース・ファン・デル・ローエ
・1932～1933私立バウハウス・ベルリン
　校長：ミース・ファン・デル・ローエ

ヴァイマールのバウハウスは閉鎖され、1925年にデッサウに移転、「市立バウハウス・デッサウ」となった。デッサウでの校舎はグロピウスの設計によるもので、モダニズム建築として各国に紹介された。グロピウスは1928年に校長を退き、グロピウスの後継者にはハンネス・マイヤー(Hannes Meyer, 1889～1954)が指名された。1930年にマイヤーは解任され、ルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエが校長に就任、1932年にデッサウ校は閉鎖しベルリンへ移転し私立学校になった。ミース・ファン・デル・ローエの方針はマイヤーの「バウエン」を継承しつつも、政治色を払拭するものだった。しかし1933年にはナチスにより閉校にされた。ミース・ファン・デル・ローエらはアメリカに亡命・移住し、バウハウスの運動を伝えた(アメリカでの「ニュー・バウハウス」)。初期には、予科課程を担当していたヨハネス・イッテン(Johannes Itten, 1888年―1967年)の考え方から、教育内容は合理主義的(機能主義的)なものと表現主義的(神秘主義・精神主義的、芸術的、手工業的)なものとを混合するやり方で教えられていた。その後、グロピウスは「ロシア構成主義」やテオ・ファン・ドースブルフによるデ・ステイルの、より合理主義的・機能主義的な考え方の影響を受けた。そのこともあり、グロピウスと精神主義とも言える教育理念を持つヨハネス・イッテンとの間に対立が生じ、イッテンが1923年にバウハウスを去った。ムテジウスの系譜に連なるマイヤーは唯物論の立場から「バウエン」を唱え、全てを規格化・数値化・計量化し、合目的性・経済性・科学性を徹底的に重視させた。これにより「ドイツ表現主義」的な審美性は無くなり、造形の呼称は「美」に代わって「形成」(Gestaltung)とされた。ハンネス・マイヤーの手腕でバウハウスは初めて黒字を生み、国際的な評価が高まり、同校のデザイン活動は最高潮に達していた。1929年6月にマイヤーの後援でバウハウス内に「ドイツ共産党細胞」という同好会が結成された。マイヤー自身が公然たる共産主義者であったこともあり、さらにバウハウスはナチスら右翼勢力に敵視されるようになる。

日本からバウハウスに留学した人物としては、水谷武彦(東京美術学校助教授)と山脇巌・道子夫妻が知られる。水谷は帰国後、美術学校でバウハウス流の造形教育を行った。山脇巌はバウハウス閉鎖後日本に帰国し、バウハウスで学んだフォトコラージュによる作品「バウハウスへの打撃」(ナチスの突撃隊とバウハウスの写真などを組み合わせた)を制作した。その後、日本大学芸術学部の教授職に就きバウハウスの経験をもとにカリキュラムを作成する。これが日本で初の大学におけるデザイン教育となる(当時は美術学科の中にあるデザイン専攻。現在はデザイン学科として独立)。

3．バウハウスの予科教育

バウハウスの予科教育はヨハネス・イッテンが(1888～1967)基礎を作った。イッテンはスイスのベルンに生まれ、ベルンの郊外ホーフヴィル(Hofwil)で教育学を専攻した。1908年から1909年まで小・中学校の教員を務めている。青騎士、分離派の芸術家と接触を持ち、美術に傾注するようになる。画家アドルフ・ヘルツエル(Adolf Hölzel)の弟子となり薫陶を受けている。ベルリン等で個展を開き才能を認められる。1917年にはウイーンで絵画学校を開設している。バウハウス校長のグロピウスに才能を認められ、1919年10月にバウハウス予科教育の教員として招聘を受けている。バウハウスの教師の中にはパオル・クレー、カンディンスキーと言うような非常に高名な芸術家がいた。その中でイッテンは生粋の教師

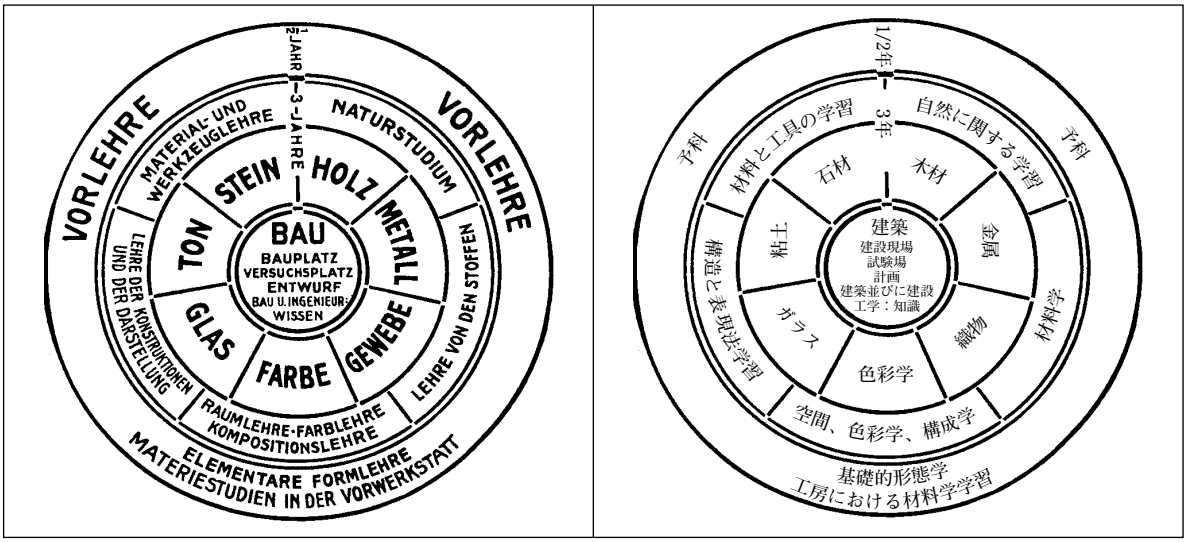

図１　校長グロピウスが 1922 年に作成したバウハウスにおける教育プログラム[4]（右はその日本語訳）

であった。教師と言っても国家が作ったカリキュラムをそのまま教えるのでなく、自分で教育法を考案した人である。イッテンは色彩論の教育者として後世に名を残した。また著書“Kunst der Farbe - Studienausgabe（色彩の芸術－学習書）”[註3]は今でもグラフィック・デザインの世界では最初に学ぶべき本の一つと言われている。イッテンは自ら絵の具を混ぜ、色彩の調和について研究を行ったそうである。イッテンは「調和する色彩」を教えた。調和を大切にすることはブルーノ・タウトが常に言っていた「建築は調和の芸術である」という言葉と一致する。

バウハウスでは教育のカリキュラムがあった。これを図１に示す。予科の中に「基礎的形態学、工作場における材料学」というものがあるが、これをイッテンが担当した。イッテンは予科教育を通してバウハウスの実質的な主導者的存在となり、学生への影響力は大きかった。バウハウス時代イッテンは剃髪していた。現在でいうスキンヘッドである。その姿は芸術家・教育者と言うよりも宗教家と言った趣を漂わせていた。イッテンの基礎教育はアジアにおける自然観や宗教観が根底にあった。こういう点もブルーノ・タウトの考え方と共通点がある。

従来の美術学校では美術の才能は天賦のものであると言う考え方であった。しかし教育学を専攻したイッテンは教育と訓練によってその才能は身に付くと考え、教育を行った。イッテンの指導した予科教育カリキュラムは高く評価され、我が国を含め後世の美術、デザイン教育に多大な影響を与えた。イッテンは伝統的な絵画にも興味

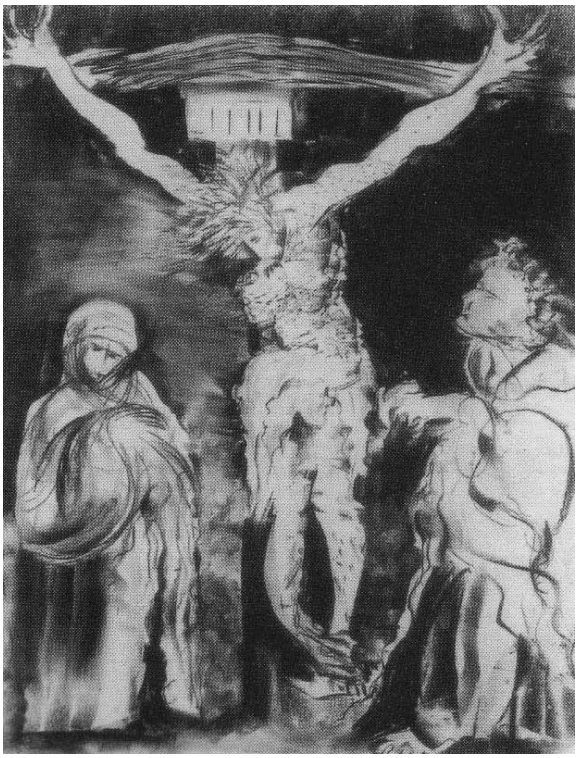

図２　グリーネヴァルドの作品「イーゼンハイムの祭壇画」[4]

を持ち1500年代にマチアス・グリーネヴァルト（Mathias Grünewald）[註4]によって描かれた「イーゼンハイムの祭壇画」（図２）を教材として使用し、絵画の分析を行っている。一方自然の観察に興味を持ち、学生に特にあざみのスケッチをさせた。あざみは他の植物と異なり、非常に

図4　バウハウス時代のヨハネス・イッテン[4)]

図5　ベルリンに建ったSommerfeldの家、内部[4)]

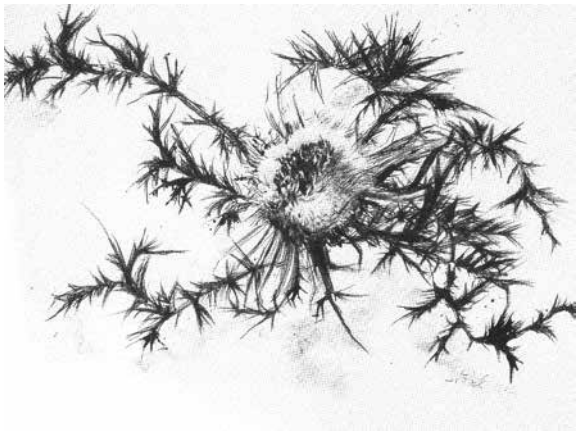

図3　グンタ・シュテルツル(Gunta Stölzl)が予科過程でイッテンの指導の下に描いたアザミ(1920年)[4)]

複雑な形態をしている(図3)。現在でいうフラクタルな形とも言える。これを正確にスケッチする事を学生に要求した。

イッテンはグロピウスとの意見対立から1923年にバウハウスを去る。一旦スイスへ戻るが、1926年ベルリンへ出てきて私塾イッテン・学校(Itten Schule)を創設する。この学校には羽仁もと子・吉一が創設した自由学園から派遣された留学生山室光子、笹川(旧性今井)和子がいた。この二人は帰国後自由学園工芸研究所を興し、現在もイッテンの教えを元に工芸品の製作を行っている。残念ながらベルリンのイッテン・シューレはナチスによって1934年に閉鎖され、イッテンは再びスイスへ戻り、創作活動を継続した。

イッテンの後任としてバウハウスの予科を担当したのはハンガリー出身のラスツロ・モホリー・ナギー(Laszlo Moholy-Nagy, 1895—1946)とヨゼフ・アルバース(Josef Albers, 1888—1976)であった。アルバースはイッテン同様教育学を専攻し実際に8年間学校の教員を務めている。ナギーは写真機を使用した造型を開発し、教育に取り入れた。モンタージュ写真、多重露光、画像の反転、二重撮影等を行い、それらを視覚表現として用いた。多くはポスターの制作に用いられた。しかしこれらの技術が花開いたのはバウハウスがデッサオに移ってからである。イッテンがバウハウスを去って、合理主義・機能主義(工業デザインや大量生産に合致するような方向)が、バウハウスの中心的な教育傾向となっていった。モホリー・ナギーもナチスの弾圧を受け米国へ亡命し、シカゴでニュー・バウハウスを起した。

4．ヴァイマール時代の成果

建築作品としてはグロピウスとアドルフ・マイヤー(AdolfMeyer)が1920／21年にベルリンに建設したゾンマーフェルトの家(Haus Sommerfeld Berlin)がある。木造2階建てで内部は木(チーク材)の特徴を生かした瀟洒なものであった(図5)。ここにはイッテンの影響もうかがわれる。一方外観はフランク・ロイド・ライトの影響もうかがわれる作品であった。その他当時の作品を紹介する(図6～11)。

図６　オットー・リンディヒ（Otto Lindig）作、新しい形態を求めたティーポット。高さは 59cm、1922 年[4)]

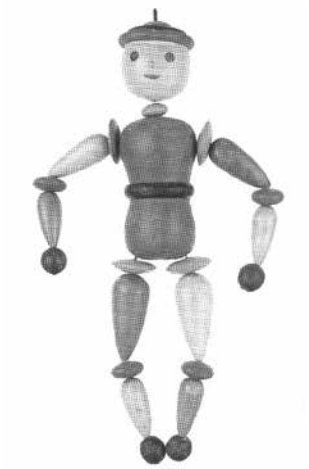

図７　ヨーゼフ・ハルトヴィッヒ (Josef Hartwig）作、あやつり人形 1923 年[4)]

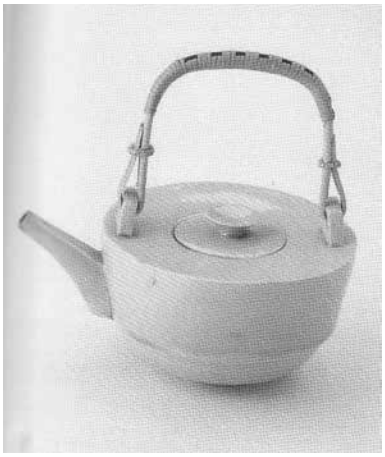

図８　テオドール・ボルガー（Theodor Borger）作、ティーポット、高さ 12cm、1923 年[4)]

図９　テオドール・ボルガー（Theodor Borger）作、高さ 10.5cm 磁器製ティーポット 1923 年[4)]

図 10　テオドール・ボルガー（Theodor Borger）作、モカ入れ 1923 年[4)]

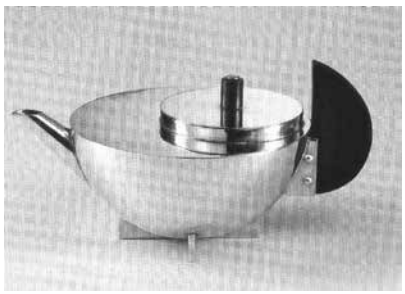

図 11　マリアンネ・ブラント（Marianne Brandt）作、ティーポット 1924 年[4)]

註１）ドイツヴェルクブンド：わが国では工作連盟と翻訳されてきた。工作というと、小・中学生が本立などを作ることをイメージしてしまう。ヴェルクブンド（Werkbund）はそういう意味ではなく、1907年にドイツで創立された、創造的作業と協同により、産業活動の向上を目的とした連盟の事である。以前の住宅は貴族の為の物であった。一般労働者の住宅は非常に粗末なものであった。ドイツ革命以来一般労働者も健康な住宅に住めるようにといった社会主義者の運動もこのヴェルクブンドには含まれている。簡単に工作連盟と訳すべきでないと筆者は考える。英米の文献を見てもあえて翻訳せず、“German Werkbund”としている。

註２）ヘルマン・ムテジウス（Hermann Muthesius：1861-1927）大邸宅を初め、事務所建築などをベルリンに残した。シャロッテンブルグ工科大学（現在のベルリン工科大学）で建築学を勉強し、ベルリンの帝国議会を設計したパウル・ヴァロット（Paul Wallot）の設計事務所で働く。大学を卒業するとドイツの建設会社に勤務し、来日する。３年間東京で働き、ドイツのプロテスタント教会の工事を行う。アジアを旅行しながら1981年にドイツに帰国している。官庁関係の仕事をし、建築雑誌の編集者も務めている。1896年にロンドンのドイツ大使館文化部に勤務する事となる。そこで英国の田園都市、田園住宅に興味を持ち調査を行い、関連の著作を多数発表する。1904年に帰国後ベルリンに自邸を初め、英国の田園住宅風の建物を多数設計する。その代表作の一つがフロイデンベルクの住宅である。ドイツヴェルクブンド（Deutscher Werkbund）でも活躍し、1910年から1916年の間、会長を務めた。

註３）原文はドイツ語であるが、英訳本も多くの読者を得た。わが国においても大智浩により翻訳され、「ヨハネス・イッテン色彩論」という書名で美術出版社より出版されている。

註４）マティアス・グリューネヴァルト（Matthias Grünewald, 1470／1475年頃 - 1528年８月31日）は16世紀に活動したドイツの画家。ドイツ絵画史上最も重要な作品の１つである『イーゼンハイム祭壇画』の作者である。ドイツ・ルネサンスの巨匠デューラーと同世代である。

〈参考文献〉

１）田中辰明・柚本玲「建築家ブルーノ・タウト―人とその時代、建築、工芸」オーム社
２）田中辰明「ブルーノ・タウト・・日本美を再発見した建築家」中公新書2159
３）田中辰明「ブルーノ・タウトと建築・芸術・社会」東海大学出版会
４）Magdalena Droste, Bauhaus 1919～1933、Taschen
５）Bauhaus Berlin Archiv／Berlin, Bauhaus Berlin Weingarten